

CPTA2023-03



腰部脊柱管狭窄症における Modic Change type 1 の 有無による腰部アライメントの比較

西川整形外科 東宮 由佳

Key words: Modic change type1、腰部アライメント、腰部脊柱管狭窄症

目的

腰痛は最も多い整形外科疾患の一つであり、近年は腰部アライメントと腰痛との関係が注目されている。椎体終板変性である Modic Change(MC)の中でも type1(以下 MC1)は腰痛の発生に関連し、MC1 の患者は健常者と比較して腰椎前弯が減少する傾向があったと報告されている。そこで本研究の目的は、MC1 の存在と腰部脊柱管狭窄症(Lumbar Spinal Stenosis:LSS)の患者における腰部アライメントとの関係を明らかにすることとした。

方法

対象は診療録より後ろ向きに調査し、当院にて MRI 所見から LSS と診断された 60 名(男性 35 名、女性 26 名、平均年齢 71.6 ± 8.8 歳)とした。MC1 を有するものを MC 群とし、MC1 が無い者を LSS 群とした。先行研究より腰部アライメントとして腰椎前弯角、腰仙角を採用し 2 群間で比較した。統計処理は年齢、腰部アライメントを t 検定で、性別をカイ二乗検定で分析した。P<0.05 を有意と判定した。

結果

2 群間に年齢と性別に有意差を認めなかった。腰部アライメントの腰椎前弯角は MC 群で $35.4 \pm 8.1^\circ$ 、LSS 群は $45.4 \pm 10.9^\circ$ となり、有意差を認めた。腰仙角は MC 群で $33.0 \pm 6.7^\circ$ 、LSS 群では $38.2 \pm 8.1^\circ$ であり、有意差を認めた。MC 群は LSCS 群よりも腰椎前弯角、腰仙角が有意に減少していた(P<0.05)。

結論

本研究では LSS 患者間で比較しており、LSS の MC1 を有する者は、MC1 がない LSS 患者と比較して腰椎前弯、腰仙角が減少していることが示唆された。

研究を終えての感想

研究や学術の重要性は十分に理解していましたが、実際に自分で研究を行い、発表・論文化することにはなかなか踏み出せずにいました。しかし、皆さまのご協力のおかげで、このような貴重な機会をいただき、無事に研究の実施から発表、論文化まで進めることができました。

英語論文の採択は今後の課題ではありますが、今回の経験を通じて研究がより身近に感じられるようになり、次の研究活動へとつなげていきたいと思っております。今後も、患者様への治療の発展に貢献できるよう、研鑽を積んでまいります。

改めまして、この度は誠にありがとうございました。